

3 水平・奥行きを強調する方法

「水平」は、観察者から見て水平に伸びる、横方向の長さをいい、「奥行き」は観察者の視線の方向にそのまま長さを感じる場合を言う。水平の長さの強調は主に建物の外観の巨大さを強調する方法であり、奥行きは、内部空間である場合が多い。

1.3.1 果てしない反復

同じ意匠の柱、フレーム、開口などが繰り返して反復することで、奥行き・水平方向を強調する建築的手法。この手法において最も重要なのは反復するものの意匠ではなく、反復数である。反復の数が多い方が強く意識される。また、鉛直方向でも、高層ビルの意匠などに用いられることがある。



図 アッタロスのストア

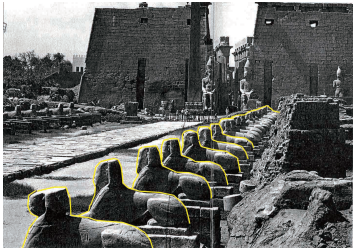


図 ルクソール神殿

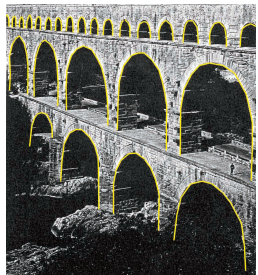


図 ポン・デュ・ガール

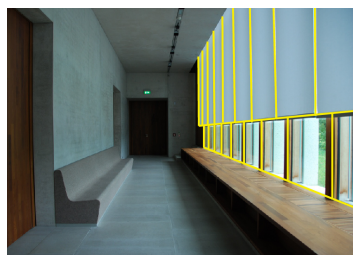
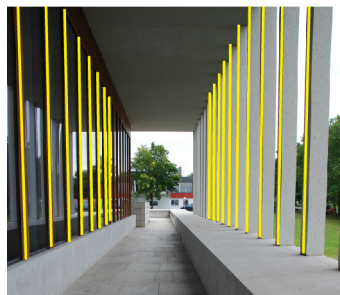


図 ドイツ文学史料館

＜アッタロスのストア BC159~BC138＞ ギリシャ

このストアは、ペルガモン王アッタロス二世(在位前159年から138年)が前150年ごろ寄贈したものであることが、アーキトレーヴにあった大きな碑文(Agora Inscription, vol. I 6135)から知られている。

二階建て列柱廊の長さは115メートル以上、奥行きは20メートルに達する。内部には二重の列柱が並んでいる。規則正しく並んだこれらの列柱により、内部空間で感じる奥行きがより強調されたものとなっている。

＜ルクソール神殿 正面 第18~19王朝 BC1490~BC1223頃＞

「1.4 壁面」である大塔門は全長65m、高さは25mである。その門へ続く道を荘厳なものにするために、道に向かって顔を向けるスフィンクスの像が並列されている。

＜ポン・デュ・ガール BC1c末＞ フランス

基礎は大スパンのアーチ。上部にいくに従い小さくなる。構造上の理由ではあるが、足下の大きなアーチは周囲に存在する岩・樹木・川などとの大きさの対比が強調されるという偶然の効果も生まれている。

＜マールバッハ ドイツ文学史料館 2007＞ ドイツ

デイヴィッド・チッパーフィールド設計、建物のファサード、またカーテンやサッシなど、同じデザインのもので繰り返して使われることで空間に奥行きが生まれている。

この美術館は、4.1で挙げる青森県立美術館の例と同様、地下空間に展示室が広がり、外観からはその空間の大きさが伺い知ることが出来ない。内部に入ると新鮮な驚きとともに、落ち着きのある空間は心地よい。

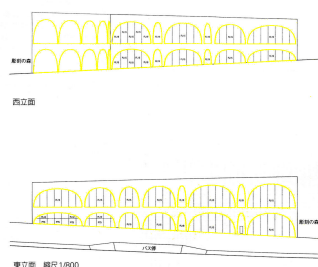
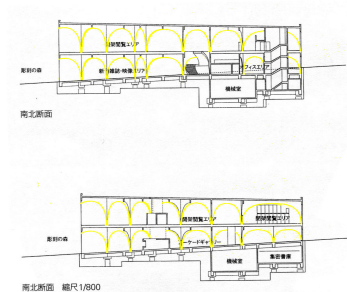


図 多摩美術大学図書館
上から順に
写真
断面図（二面）
立面図（二面）

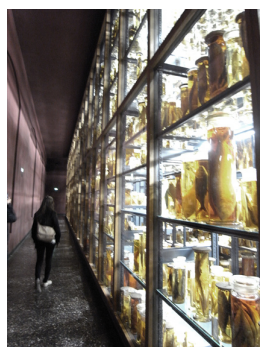


図 自然史博物館

<多摩美術大学 図書館 2007>

伊東豊雄設計。

建物は、カーブしながら交差する SC 構造のアーチ列に、RC ボイドスラブを載せた構造体を積み重ねた構成である。フランジ部を補強した鉄板によるアーチ列の交差が軸力を受け持ち、これを耐火被覆と座屈止めを兼ねたコンクリートでくるむという SC 構造である。この構造により、加重条件の厳しい図書館で柱脚は 400mm × 200mm の長方形がクロスする形に絞られた。

アーチは図書館内部だけではなく、ファサードまで連続している。そのため、通常建築の内部で感じる「外壁」の存在が曖昧になり、アーチがどこまでも連続していくような感覚を受ける。これは、平面的に広がる「果てしない反復」の例ととれるであろう。

<ベルリン自然史博物館 改装部 2007> ドイツ

オーグスト・ティーデ設計の建物のリノベーション。アルコールコレクション（ホルマリ漬け生物のアーカイブと思われる）の展示部分が主な改装部。アーカイブは床から天井に至るまで、棚一面に並べられ、棚は図書館のように規則正しく並ぶ。観覧者は部屋の周囲を歩くことができるが、無数の瓶が並ぶ様は圧巻で、果てしない広がりを感じる。

1.3.2 横（水平・奥）線の強調

強調する方向が異なるが「縦線の強調」と同様の手法。

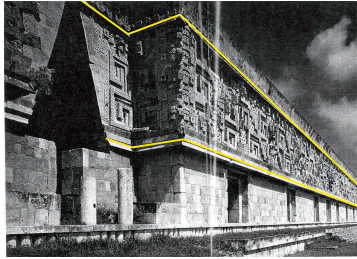


図 ウシュマル総督の館

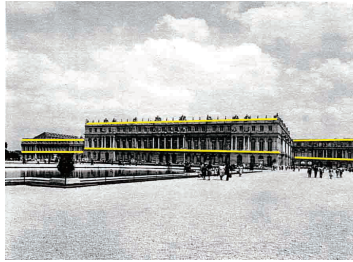


図 ヴェルサイユ宮殿

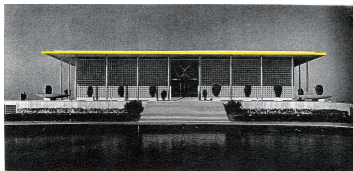


図 アメリカ大使館

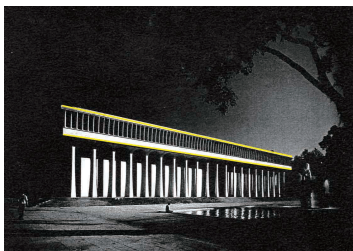


図 ウッドロウ・ウィルソン・スクール



図 ソールズベリ大聖堂

＜ウシュマル総督の館 古典期末期＞ メキシコ

このファサードの大きさは、高さ 8.6m、奥行きはたったの 12m である。しかしながら、二本の横線の強調と、それに挟まれた幾何学的な反復する模様との相乗効果によって長さを強調している。

＜ヴェルサイユ宮殿 庭園側正面 1678~1688＞ フランス

ルイ・ル・ヴォー、ジュール・アンドゥーアン・マンサール設計。水平のラインを強調。鉛直方向の柱の果てしない反復も見られる。

＜ニューデリーのアメリカ大使館 1954＞ インド

エドワード・デュレル・ストーン設計。

全体的に細い、薄い部材で構成されている。しかし、柱の細さやファサードのグリッドの細かさに比べて、屋根の厚みが一番際立ち、水平方向の線が強調されている。

＜ウッドロウ・ウィルソン・スクール＞ アメリカ

ミノル・ヤマザキ設計。ゴシック的な外観。水平のラインを強調するように並ぶ 60 本のプレキャストコンクリート列柱が印象的である。幅 27.4m 高さ 8.5m。

＜ソールズベリ大聖堂（セントメアリ）内部 1220~65＞ イギリス

内陣は外陣よりも長大である。大小二つの突出した交差廊。外陣の幅は 23m、身廊の天井高は 25m のため、奥行きの深い印象。高窓、トリフォリウム、大アーケードの三層が、古典ゴシックのように付け柱で垂直に連結されず、独立した水平層となっている。一見高さの強調をしない矛盾した印象の「横線」も奥行き方向を強調することで、聖堂内の荘厳な空間を作り出すことに成功している。



図 サンタ・クローチェ聖堂

＜サンタ・クローチェ聖堂内部 1294~1443＞ イタリア

身廊 90.5m × 19.5m、天井高 34m.

柱間大。八角形のピアは身、側廊を分離せず堂内は窓の小さい平らな平面で限定され、一つのまとまった大空間となっている。

天井の梁の反復、またラインを強調した側面の意匠が奥行きを感じさせる。



図 パラッツォ・ウフィーツィ

＜パラッツォ・ウフィーツィ 1560~80 頃＞ イタリア

フィレンツェ公コジモ一世の要望により、市内に散在していた13の行政庁舎を一カ所に集めるために建設された新庁舎。単一の連続したファサードの中におさめられた。

幅18m長さ140m。

長大な四層のファサードは三つのベイから成る基本単位の繰り返しで構成。パラッツォ・ヴェッキオの方向からこの「路地」に入る場合、それは都市街路としての外部空間であるが、回廊を通じてアルノ川対岸の建物を見ると、同じ場所はただちにパラッツォ内の中庭のように感じられ、そこには巧妙にして鮮やかな視覚の逆転が意図されている。



図 シロダム

＜シロダム 2002＞ オランダ

MVRDV 設計。

カラフルなパッチワークのような建物は、その色分けによって水平・奥行きの線が強調されている。

＜金比羅宮プロジェクト 2004＞

鈴木了二設計。

金刀比羅宮をのぼった先の斜面に埋もれるようにして建てられている建物。内部は鉄で作られ、上方から光の差し込む神聖な空間である。天井はところどころ鉄が切り取られて照明が仕込まれ、建物内の奥行きが強調されている。



図 金比羅宮プロジェクト

1.3.3 (先の見えない) カーブ



図 ブルフザール司教館 階段室

(先の見えない) カーブを生み出すことにより、曲がった先に空間が続くと想起させる建築的手法。「先に空間が続くと想起させる」ために、前述の 3.1「果てしない反復」や 3.2「横（水平・奥）線の強調」と組み合わせて用いられることが多い。

＜ブルフザール司教館 階段室 1730＞

階段の先が視界に入らない。



図 ヘルシンキ現代美術館

＜ヘルシンキ現代美術館 1998＞ フィンランド

スティーブン・ホール設計。通称「キアズマ美術館」と呼ばれる。エントランスホール正面に位置する、展示室へ繋がる巨大なスロープは、先の見えないカーブとなって、奥行きを強調する。また、上方の導線のせり出しも横（奥）線の強調に繋がっている。また、この巨大なスロープは、展示室に入るまでのシークエンスを持たせる「4.1 洞窟型」にも分類出来る。



図 Nai
上 アプローチ
下 模型

＜NAI (The Netherlands Architecture Institute) 1993＞ オランダ

ヨー・コーエネン設計。
エントランスに向かうまでの長いアプローチ。
要素の反復と、先の見えない緩やかにカーブした平面型は、奥行きの深さを実物以上に長く見せる。

＜上海万博 デンマーク館 2010＞ 中国



BIG 設計。

一階に配置された人魚像を取り巻くようなループ上の建物。スロープは壁面で覆われ、スロープの奥行きは強調されている。また、この閉じたスロープによって屋上に上った時の視界の広がり強調される（4.1「洞窟型」）。



図 デンマーク館

上 スロープ内

下 スロープを抜けた先の屋上

1.3.4 遠近法・錯視

実際よりも奥行きを長く、水平に広く見せる建築的手法。奥に向かって細くなるデザインの鏡面や透明素材が用いられる場合もある。また、湾曲面や、壁面などの模様によって強調される場合もある。

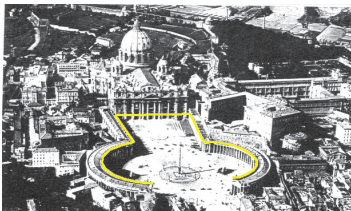


図 サンピエトロ広場

＜サンピエトロ広場 1667＞ バチカン

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ設計。幅240mの巨大な楕円形。左右対称に柱列回廊が配され、柱の数は284本にも上る。楕円形と三角形の組み合わせられた巨大な広場。



図 テアトロ・オリンピコ

＜テアトロ・オリンピコの舞台＞ イタリア

アントニオ・パラーディオ設計。

広さの限られた舞台空間の中に、奥へと続く空間が作り出されている。実際にはそれほど大きな劇場ではないが、巨大に感じられる劇場である。この理由として、階段席の上部の列柱、その上部に並ぶ像の存在が挙げられる。石造りの神殿のような印象を与える重厚な劇場である。

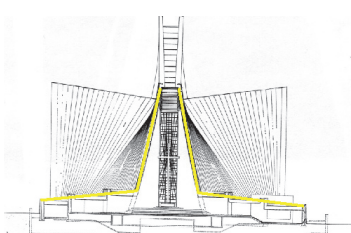
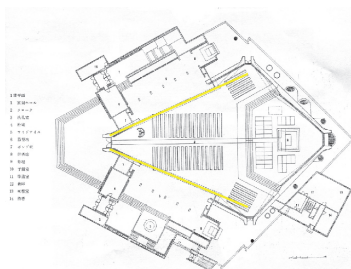


図 東京カテドラル
聖マリア大聖堂 平
面図・断面図

＜東京カテドラル聖マリア大聖堂 1964＞

丹下健三設計。

中央に無かい高くなる天井とそこから差し込むトップライト、また菱形をした平面形、さらにコンクリート打ちはなし仕上げによる素材の重みなどにより、荘厳な空間を作り出している。